

Title	『源氏百人一首』小考
Sub Title	An essay on Genji Hyakunin issyu
Author	山本, 令子(Yamamoto, Reiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2011
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.101, No.1 (2011. 12) ,p.249- 265
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川村晃生教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01010001-0249">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01010001-0249</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『源氏百人一首』小考

山本 令子

## はじめに

黒澤翁満の手に成る『源氏百人一首』は、いわゆる異種百人一首の一つであり、源氏物語の作中人物百二十三人について、作中和歌一首ずつを撰び、歌仙絵風の肖像画と共に掲出した上で、上欄に詠者の小伝と歌注（詠歌の状況、一首の解釈、技巧や語句についての注など）をコンパクトにまとめている。

近年、余田充氏が凌霄文庫蔵本を翻刻紹介されたのを嚆矢として、管宗次氏の詳細な解説を付して影印本（底本は管氏蔵天保十年版）が刊行され、徳原茂実氏が武庫川女子大学蔵本を翻刻されるなど、数次にわたり本文の提供が行われた。また、余田氏が和歌本文の性格と注の内容について検討され、小町谷照彦氏が源氏物語享受史への位置付けをなされるなど、その性格も徐々に明らかになってきた。

本稿に於いては、これら諸先学の学恩を蒙り、まずは、翁満自身が草した「物論」の内容を確認する。次いで、百二十三

首の歌の配列順について考察し、和歌の採択理由を分析した上で、詠者の認定を巡る若干の問題を指摘することとした。  
い。

## 一 惣論の内容

『源氏百人一首』には、版によって順序の異同や出入りがあるものの、橘守部等の序文と、翁満自身による「惣論」が巻頭に掲げられている。この内、「惣論」は全九項目から成り、源氏物語や紫式部について論じると共に、刊行の目的や編纂の方針について審らかにしており、本書の内容や構成を検討する上で看過できない。その内容をごく簡略に紹介する。

1 物語というものは、中国の小説、江戸の草双紙に相当する他愛ない読み物である。その中で源氏物語は傑出した存在であり、殊に人物の書き分けに関しては水滸伝すら及ばない程巧みである。しかしながら、これまでの注釈は本説の指摘などに終始し、登場人物の氣質を描き分ける筆致を十分に賞美しては来なかつた。

2 紫式部という女房名の由来について、袋草紙には、若紫巻が格別深遠に作られているためとする説と、一条院ゆかりの者として武蔵野の歌に拠つたとする説の両説が挙げられている。この内、前者の説の方が、紫式部日記の公任を巡る逸話からも穏当と思われ、後者の説のように自身の呼び名に紫の文字をつけながら、物語中のすぐれた女性を紫と名付けるのはあり得ないことと思われる。

3 源氏物語の注釈書は多くあるが、北村季吟の湖月抄に摘要があるので、それ以前の物は湖月抄で凡そ足りる。その後、源注拾遺・源氏新釈・玉小櫛などによって明らかになってきたこともあるが、やはり湖月抄は本文を全備してい

て便利であるのでこれにだけ拠る人も多い。また、明らかになつてきたとは言つても、不審な点も少なくない。本書では、百余首とはいへ、新しい解釈も多く盛り込んだので、見比べて味わつて欲しい。

4 紫式部があまりに妙文を書いた罪によつて地獄に墮ちたなどという浮説は法師の作りごとに過ぎないが、王朝が短命で前代を憚ることのない中国の書物の書きぶりのように、昔の天皇に敬意をほらわず、尊号をそのままに借り用いたのは大罪という他ない。

5 小倉百人一首が広く世の人に親しまれているのは、絵入り本とかるたのおかげである。それに引き換え、現行の源氏がたるは巻名の歌をかるたに仕立てただけで、作中人物の名や物語の風情の一端を知る助けにはならない。また、絵入り本がなく、前もつて見馴れていないため、かるた遊びをしても札を取ることができず愉しめないのが、普及しにくい。そこで今、小倉百人一首の絵入り本に倣い、この本を刊行する。本書が広く読まれるようになれば、かるたも流行し、世の童子が源氏物語の一端に親しむ手引きとなるだろうと、奨める人のあるままに、僅かの暇に筆をとつて著したのである。

6 源氏物語の登場人物は凡そ三百三十余人だが、過半は名前ばかりで実態の描かれぬ人物である。また、歌を一首も詠まない人もある。従つて、これらの人物を除く百二十三人について、一人につき歌一首ずつを撰んだ。

7 歌が載せられているのに名前が書かれていない人物については、歌の詞を取つたり、その住処によるなどして、仮の名を付けた。

8 官位のある人はその極官を示すのが通例ではあるが、本書では少しでも馴染みの深い呼び名を採用し、童子が覚えやすいようにした。また、歌は物語に出てくる順に拾い入れたが、本書の頭から人物の小伝と歌注とを見合せて行つ

た時に、物語の大筋が幽かにでも思い込めるようにと工夫した箇所もある。

9 絵は童子が見馴れやすいための物であるので、人物の装束などはただ絵師に任せて大ざっぱに描かせたことを、見識ある人のためにお断りしておく。それに加えて、百二十三人の歌があるのにも関わらず、書名を源氏百人一首としたのは、凡そ源氏物語の歌による小倉百人一首のような物だということを暗に示すためであり、これ又、いぶかしむるのためにお断りする。

\*

\*

\*

この内、編集の方針に関わる項目は、凡そ3及び6〜9であり、刊行の意図は5の項に端的に述べられている。すなわち、本書が、源氏物語を小倉百人一首同様、世に広く親しまれる作品とするための入門書であったことは疑いない。と同時に、ここで見過ごしてならないことは、翁満が「惣論」の冒頭で、源氏物語の特質として、水滸伝を引き合いに出して、その人物を書き分ける筆の確かさを称揚している点である。小町谷氏が「いわば作中人物辞典ともいべきものである」と述べられたように、本書の目指したところは、単に作中和歌を足がかりとした梗概書ではない。童蒙を対象とすることや紙幅の都合からその意図を十分に果たせなかつたきらいはあるが、歌を巡るエピソードからその人物の人となりに迫り、作者が見事に書き分けた多彩な人物像を鑑賞するためのカタログともいべきものこそ、翁満の志向するところであつたのではないか。以下に於いては、翁満の編纂態度が、和歌中心ではなく、あくまでも人物中心であつたことを明らかにしていきたい。また、8の後半に言及される歌の配列順については、具体的にどのような工夫がなされてゐるか、節を改めて考察する。

二 配列意識

前節でも少しく触れたように、翁満は歌の配列順について、「且、歌は有に従ひて拾ひ入つとはいふ物の、始より順に人々の小傳と歌の解とを見合せて、源氏一部の大旨の幽にも思ひたどられなんやうにとて、殊更に物しつるも有なり」（惣論8後半）と述べている。すなわち、物語の進行順が原則であるが、物語の大旨が理解しやすいように工夫した箇所があるというのである。そこで、源氏百人一首を子細に検討すると、次の十六箇所で物語の進行に敢えて反していることがわかる。<sup>(8)</sup>

B				A					
1 2	~	7	6	5	4	3	2	1	源氏百人一首歌番号
1 8	~	1 0	1 9	9	4	3	1	8	源氏物語歌番号
帚木	帚木	帚木	帚木	桐壺	桐壺	桐壺	桐壺	桐壺	源氏物語巻名
蒜喰女	(中略)	左馬頭	光源氏君	引入太政大臣	更衣母	靱負命婦	桐壺更衣	桐壺帝	源氏百人一首詠者表記
以上、雨夜の品定め		以下、雨夜の品定め		1の返歌				5の贈歌	備考

G					F		E		D		C				
2 7	2 6	2 5	2 4	2 3	2 2	2 1	2 0	1 9	1 8	1 7	1 6	1 5	1 4	1 3	源氏百人一首歌番号
3 5 3	5 3	5 2	4 6	4 5	2 9	1 1 5	2 6	3 3	4 0	2 5	3 1 2	1 3 2	1 1 7	4 3 9	源氏物語歌番号
初音	若紫	若紫	若紫	若紫	夕顔	葵	夕顔	夕顔	夕顔	空蟬	朝顔	葵	葵	藤裏葉	源氏物語卷名
紫上	何某寺聖人	北山僧都	少納言乳母	北山尼	中将君	六条御息所	夕顔宿女房	夕顔君	軒端荻君	空蟬尼	槿齋院	引入大政大臣北方	葵上	致仕大政大臣	源氏百人一首詠者表記
															備考

M					L		K		J		I			H		
6 2	6 1	6 0	5 9	5 8	5 7	5 6	5 2	5 1	4 4	4 3	4 0	3 9	3 8	2 9	2 8	源氏百人一首歌番号
3 4 1	3 4 0	3 3 9	3 3 8	3 7 2	3 2 6	3 2 7	2 9 4	5 1 2	2 0 1	2 0 2	1 6 9	6 7	1 4 5	6 1	1 6 7	源氏物語歌番号
玉鬘	玉鬘	玉鬘	玉鬘	螢	少女	少女	松風	横笛	須磨	須磨	花散里	若紫	賢木	若紫	花散里	源氏物語卷名
夕顔乳母	大夫監	兵部君	兵部姉御許	螢兵部卿宮	雲井雁上	夕霧左大臣	冷泉院	朱雀院	源良清	藤原惟光	麗景殿女御	霧籬女	王命婦	薄雲女院	中川女	源氏百人一首詠者表記
				6 3 の 贈 歌												備考

P							O			N			(M)			
1 0 6	1 0 5	1 0 4	1 0 3	1 0 2	1 0 1	1 0 0	8 7	8 6	8 5	7 3	7 2	7 1	7 0	6 4	6 3	源氏百人一首歌番号
7 4 0	6 7 5	6 3 3	6 4 2	6 1 9	6 1 7	6 2 5	5 4 3	5 0 6	5 2 1	3 8 3	4 2 6	5 0 9	5 0 3	3 4 5	3 7 3	源氏物語歌番号
浮舟	総角	椎本	椎本	橋姫	竹河	橋姫	夕霧	柏木	鈴虫	常夏	真木柱	柏木	柏木	玉鬘	螢	源氏物語卷名
浮舟姫君	宇治中姫君	匂兵部卿宮	総角姫君	優婆塞宮	竹川女房	薫大將	落葉宮	一条御息所	三条女三宮	中納言君	近江君	紅梅右大臣	柏木右衛門督	右近	玉葛内侍督	源氏百人一首詠者表記
															5 8 の 返 歌	備考

これらを通覧すると、そこには次の二つの細則が浮かび上がってくる。

① 筋立て上、特に重要な人物を先に紹介する。(A・B・P)

桐壺更衣の悲劇にまつわる歌群を掲出するにあたって、そして源氏物語の始発にあたって、桐壺帝を紹介しておく(A)、雨夜の品定め的前提として、同時に言うまでもなく、以下の物語の主人公として光源氏君を紹介しておく(B)、宇治十帖の始発にあたって薫大将を紹介しておく(P)という手法であり、いずれもその人物の説明抜きには以下の筋立ての理解が困難になる最重要人物である。Pの事例では、91・92の歌注で薫について言及しつつも、101の薫に詠みかけられた歌の説明に際してその紹介を余儀なくされるまで、薫の登場を先送りしているようにも見えるが、これは、93～99に玉鬘の姫君たちの桜の樹を賭物にした碁打ちを巡る唱和の一大歌群が位置するなど、91・92の時点で薫を紹介してしまうと、優婆塞宮以下の宇治十帖の主要人物との関連性が薄まる危惧からではなからうか。

② 血縁者・主従等はまとめて紹介し、順序も整える。(CDEFGJKLMNO P)

たとえば、Cでは雨夜の品定め参加者の一人である致仕大政大臣を糸口に、その姉妹である葵上、二人の母である引入大政大臣北方を相次いで取り上げる。更に次いで、権斎院が紹介されるのは、その父桃園式部卿宮が桐壺帝や引入大政大臣北方と兄弟であるからに他ならない。同様に、Dでは空蟬尼と軒端荻君という義理の母娘が、Eでは夕顔君とその侍女夕顔宿女房が、Fでは六条御息所とその侍女中将君が、それぞれまとめて紹介され、Gでは紫上が祖母北山尼・その兄北山僧都を含む北山の歌群の末尾に位置づけられ、Kでは冷泉院の前に兄朱雀院を、Nでは弘徽殿女御の女房中納言君に対してこれと贈答する女御の異腹の妹近江君をその前に位置させ、更に近江君より先に、その異母兄である柏木右衛門督と紅梅右大臣を持つてくるという操作を行っている。また、若菜下巻の中務君の歌と物氣童の歌の間に位置

するOでは、歌こそ後の鈴虫巻のものであるが、若葉巻(9)の主要人物の一人である三条女三宮を紹介すると、次いで、その異母妹である落葉宮とその母である一条御息所母娘を取り上げる。更に、Pでは先述したように、薫を糸口に、優婆塞宮とその娘たち（総角姫君・宇治中姫君・浮舟姫君）、その配偶たる匂兵部卿宮をまとめて扱っている。

これらの事例に際しては、長幼・主従・夫婦の順も整えるのが原則であり、Lのように雲井雁と夕霧の歌順を入れ替えることさえ行われており、Jで惟光が良清より先に紹介されるのも源氏の側近としての序列を反映していると考えられる。尚、例外的な事例として、螢兵部卿宮と玉葛内侍督の贈答に割り込む形で、夕顔乳母やその娘たち（兵部姉御許・兵部君）、更には求婚者たる大夫監までもを紹介するMの事例が注目されるが、これは玉鬘十帖の時点より溯つて語られる流離の時代の物語を玉鬘の前史として、その紹介の前提に位置づけるものである。ただ、いずれの場合も、血縁者・主従などをまとめることによって、人物の理解を容易にするべく意を用いているのであり、その配列意識の軸となるのは、和歌の連関ではなく、あくまでも人物の連関である。すなわち、前節で述べたような、作中人物のカタログ的性格がここでも確認されよう。

さて、これらの原則・細則によっても読み解けないのがH・Iの箇所である。中川女、霧籬女という、それぞれ点景の一場面にしか登場しない二人の置かれた位置は明らかに不自然であり、それを説明する鍵は、この二箇所を一連の錯誤と看做すことである。すなわち、28に霧籬女、39に中川女が置かれるのが本来であり、故尼君邸で霰が降り風が吹き荒ぶ一夜を若紫と単衣ばかりを隔てて過ごした帰途、かつての忍び所の門を叩かせ、歌を歌い入れさせたもののつれなくされたという霧籬女を巡る挿話と、麗景殿女御・花散里姉妹を訪問する途次、ただ一度だけ逢ったことのある女の家を見出だし、歌を詠み入れさせたもののすげなくされたという中川女を巡る挿話の近似していることから、この二

つの点景を取り違えたものと考へる。また、29の薄雲女院の歌と霧籬女の歌は、物語の進行に従えば、薄雲女院の歌が先であり、特に順序を入れ替へるべき理由も見当たらない。薄雲女院も含めて、この辺りの配置には、何らかの錯誤があつたと想定せざるを得ないのである。

### 三 撰歌の理由

次に、各人物について、その詠歌が撰びとられた理由を考察してみたい。僅かにその一首を詠むばかりという人物が過半であり、前後に置かれた人物との贈答・唱和の歌が選択されるなど、配列の問題と切り離せない部分もあるが、ここでは、撰歌に積極的な理由が見出される事例を分析していく。

#### ① 通称の由来となる歌

権斎院、空蟬尼、螢兵部卿宮については、それぞれ通称の由来となる歌を撰歌している。中でも、螢兵部卿宮については、宮の「なく聲もきこえぬむしのおもひだに人のけつにはきゆるものかは」の一首のみならず、玉葛内侍督の答歌「こゑはせで身をのみこがす螢こそいふより増るおもひなるらめ」も、その乳母母娘や大夫監の歌を挿みつつ、共に載せられている。尚、夕霧左大臣、浮舟姫君の両名に関しては、通称の由来となつた一首を敢えて採らないが、これについては後述する。

#### ② 人物像を象徴する歌

その人物を象徴する印象的な一首を掲出する場合である。たとえば、源内侍が源氏にたわぶれて詠みかける「君しこばたなれのこまにかりかはんさかりすぐたる下葉なりとも」の一首は、その小伝に「老てこゝろ若くいろめきたる人也」

とあるのを、まさに体现している。同様に、「浮身世にやがてきえなばたづねても草の原をばとはじとやおもふ」の一首には臘月夜内侍督の嫋嫋たる風情が横溢し、初音巻の「ひきわかれ年はふれども鶯のすだちし松の根をわすれめや」の歌は、后がねとして、実母明石君から引き離され紫上のもとで育てられた明石中宮を象徴する一首となっている。また、朱雀院が女三宮に贈った「世にわかれ入なむ道はおくるとも同じところをきみも尋ねよ」の歌は、自身の出家後の姫宮たちの将来、わけても女三宮の処遇を気にかけて続けた院らしい詠みぶりであり、柏木右衛門督の辞世の一首「ゆくへなき空のけぶりとなりぬともおもふあたりをたちははなれじ」は、女三宮への執着故にその短い生涯を閉じることになつた悲劇を端的に物語っている。これらの歌は、その人物を印象的に彩るものとして撰び採られたことが容易に推察される。

### ③ 湖月抄所引の諸注で高い評価を与えられた歌

第一部については、湖月抄所引の細流抄などの諸注で高い評価を与えられた歌がかなりの高率で採られている。引入大政大臣北方、光源氏君、薄雲女院、六条御息所、紫上、夕霧左大臣がそうである。この内、光源氏君以下の五人については、高い評価を受けている歌が複数存するが、その内の一首が撰び採られている。たとえば、六条御息所は生霊・死霊としての歌を除き九首の歌を詠んでいるが、彼女の歌として源氏百人一首が掲出した「袖ぬるゝこひちとかつはしりながらおりたつたごのみづからぞうき」の一首について、細流抄は「此物語第一の哥と云云」と賞賛している。また、紫上の歌として撰ばれたのは、初音巻の「くもりなき池の鏡に万代を住べき影ぞしるくみえける」の一首であり、六条院の女主人としての風格は窺われるものの、彼女の代表歌とするには疑義もあるかもしれない。この歌の採録には、細流抄の「紫上の返哥、六条院の躰也、廣大に面白き哥也。」、孟津抄の「此哥源をさして祝たるなり。紫のわが身ををき

てよめる心面白し。」といった評価の後押しがあつたのではないか。更に、夕霧左大臣については、その呼び名の由来となつた一首ではなく、少女巻の「霜こほりうたてむすべるあけぐれの空かきくらしふるなみだかな」の歌を採っているが、この歌について細流抄は「景気面白し、三四ノ句殊勝云云」と評している。

ただし、評価の高い歌があつても撰ばれない場合も存する。先述の朱雀院、玉鬘の他、末摘花姫君については、その理由が推察できる。すなわち、世間尋常な姫君として描かれている蓬生巻での詠歌が評価されているものの、敢えてこれを採らず、彼女のトレードマークともいふべき「から衣」を詠んだ一首を採っている。末摘花姫君の心高い側面には踏み込まず、をこ者としての側面にのみ焦点があてられているのである。この他、明石入道、明石君についても、評価の高い歌を採歌してはいない。

更に、第二部以降は、評価の高い歌があつてもこれを採らない傾向が急速に強まる。一条御息所、薫大将、優婆塞宮（宇治八宮）、総角姫君（大君）、宇治中姫君、浮舟姫君、中將（小野の妹尼の娘婿君）がそうである。殊に宇治十帖の主要人物については、浮舟の呼び名の由来ともなる象徴的な一首が撰ばれないことをはじめとして、撰歌に至つた理由が不明である場合が少なくない。一例を挙げれば、二十四首を数える匂宮の歌の中から、何故、薫にかわつて八宮に返歌した「遠近のみぎはのなみはへだつともなほふきかよへうちの山かぜ」の一首が撰ばれたのか。新たに導入された法則があるとするならば、その説明は今後の課題である。

#### ④ その他

各人物を半丁で紹介するという紙幅の都合から、人物像が簡略化されることは否めない。先述の末摘花姫君などがその典型であろうが、明石乳母、六条院中将君についても、詠歌の選択によって、人物の一側面が削ぎ落とされているよ

うに思われる。すなわち、この兩人は二首ずつの歌を詠んでいるが、明石乳母については、下向に際して、明石へ行か  
せずに取り返したいなどと戯れかかった源氏に対して、思慕する心は内に秘め、もの馴れた風に切り返してみせたとい  
う濡標巻の一首ではなく、娘を手放す明石君との贈答の歌を撰ぶことで、明石母娘の別離の悲劇に焦点をあてている。  
また、中将君については、同じ幻巻の詠であつても、その召人性があらわになる葵祭の日の源氏との贈答の一首ではな  
く、紫上付きの女房として一周忌に臨む哀しみの歌を撰ぶことで、紫上追悼の物語の一齣に収まつている。これらは、  
人物像の些少とも捉え得るが、歌の配列の操作と共に、「源氏一部の大旨の幽にも思ひたどられなんやうにとて」の工夫  
と看做したい。

#### 四 詠者の認定を巡る問題

最後に、源氏百人一首の詠者の認定を巡る問題について付け加えておきたい。この点については、余田氏によつて、  
次の三箇所が指摘されてきた。

① 「歎きわび空にみだる、我たまをむすびとゞめよしたがひのつま」の歌については、六条御息所の生霊の歌と考  
えるのが通説であるが、生霊に取り憑かれ苦しみの声を出している葵上の詠とする。

② 「我が身こそあらぬさまなれそれながらそらおほれる君はきみなり」の歌については、六条御息所の死霊がそ  
の口を借りて語つた物氣童の詠とする。

③ 「こゝろあてにそれかとぞみる白露のひかりそへたる夕顔の花」の歌については、夕顔ではなく夕顔宿女房の詠  
とする。

本稿に於いては、次の二箇所の問題点を指摘したい。

④ 落葉宮に対する思慕を訴える夕霧の歌に対して、「藤ごろも露けき秋の山びとは鹿のなく音に音をぞそへつる」と返した小少将君をとりあげていない。

⑤ 「世の常のいるとも見えず雲居までたちのぼりける藤なみの花」の歌については、紅梅右大臣の歌ではなく、それとは別人の按察大納言の詠とする。

まず、④について確認する。一条御息所の姪であり、その膝下で幼少より育てられた小少将君は、一条宮の女房として、夕霧と落葉宮の媒をつとめる。宮が手すさびに書き付けた歌などを夕霧のために盗み出し、ついには宮のこもる塗籠に導き入れるなど、落葉宮物語に於いて重要な役割を果たす人物である。該歌については、源氏一部抜書の兼載自身による朱書人に「おちはのみや返し」とするものの、小少将君の詠であることは動かしがたく、翁満が兼載説に拠ったことも想定しにくい。単純な見落としの可能性が高いものの、その一場面のみならず柏木・夕霧の両巻にわたって活躍する人物を欠くことは、返す返すも残念という他ない。

次に、⑤について述べたい。該歌の詠まれる宿木巻に於いては、先行する竹河巻で左大臣が亡くなり、右大臣であった夕霧が左大臣に、紅梅大納言が右大臣に、それぞれ昇進したにも関わらず、しばしば夕霧を右大臣とする本文が見られるなど、官職表記に問題が存する。弄花抄は、巻の前半、夕霧六の君に婿取られようとする匂宮が猶も「かの按察大納言の紅梅の御方」に思いを寄せているという条りの按察大納言については、「紅梅右大臣 竹川に右大臣也 以前のこたく大納言といひつけたる也」とするものの、巻の後半、該歌の詠まれる藤壺の藤花宴で、今上の女二の宮の婿君としてますます時めく薫を前に、藤壺女御への思慕からその娘女二の宮を得たいと願っていた按察大納言の腹立ちを描く条

りでは、「誰ともなし 紅梅のには有へからず」と注する。これは、匂宮の紅梅右大臣の継娘宮の御方への心寄せが紅梅巻に詳しく描かれていたのに対し、按察大納言の藤壺女御母娘に対する思いが唐突に持ち出されることに起因するかと思われる。この弄花抄の説は、時に否定的見解を付されつつも、細流抄、明星抄、孟津抄、岷江入楚などに引用されていく。翁満が紅梅右大臣とは別に、按察大納言を立項したのも、こうした注釈史の中に位置づけることができる。

### おわりに

以上に考察してきたように、源氏百人一首には瑕疵も指摘できるものの、人物に焦点をあてた源氏入門書という意図に沿って、各人の歌を取捨選択し、配列に工夫を凝らしたことは疑いない。惣論の冒頭で、源氏物語の価値を登場人物を書き分ける筆の確かさに置いた翁満の意思が随所に看取れるのである。

### 注

源氏百人一首の引用は、後掲注2の影印により私に翻字し、清濁を分かち、句読点などを施した。また、源氏物語の作中人物の呼称については、源氏百人一首のそれに拠ったが、一般的な呼称と大きく異なるものについては、括弧内に一般的な呼称を注記した。

- 1 「資料紹介」凌雲文庫本『源氏百人一首』（『四国大学紀要』（人文・社会）一九九五年十二月）
- 2 『源氏百人一首』（和泉書院影印叢刊九二）和泉書院・一九九九年
- 3 「源氏百人一首（翻刻）」（『武庫川国文』第七十一号・二〇〇八年十二月）

- 4 「源氏百人一首」について——和歌本文の性格と注の検討——」（『凌霄』第三号・一九九六年二月）
- 5 ①「源氏百人一首のことなど——源氏物語享受の一位相」（『源氏研究』第四号・一九九九年四月）、②「百人一首版本の源氏物語」（『源氏物語へ 源氏物語から』・笠間書院・二〇〇七年九月）、③「源氏物語の和歌をめぐる問題」（和歌文学会第五十四回大会講演、二〇〇八年十月十八日）
- 6 各項目に、私に通し番号を付した。
- 7 小町谷氏前掲論文↓5①
- 8 源氏百人一首の歌番号については、私に通し番号を施し、源氏物語の歌番号については新編国歌大観に拠った。
- 9 余田氏も指摘されるように、若菜上下については、単に若菜巻と記しており、分巻の意識が薄いように思われる。
- 10 厳密に言えば、玉鬘一行との邂逅を喜ぶ右近の詠をも玉葛内侍督の歌の前に位置させるべきであろう。
- 11 惣論3の記述を踏まえ、以下の諸注の引用は、特にことわりのない限り、湖月抄所引のものに拠った。
- 12 源氏物語聞書・一葉抄・弄花抄でも「此哥ことよろしき聞えあり」と評する。
- 13 引用は、中野幸一氏編『源氏一部抜書 源概抄 源氏こか、み 源氏小鏡 光源氏一部詞并詞』（源氏物語古註叢刊第十卷）・勉誠出版・二〇一〇年に拠る。
- 14 以下、弄花抄の引用は、伊井春樹氏編『弄花抄・付源氏物語聞書』（源氏物語古注集成）・第八巻・桜楓社・一九八三年に拠る。